

ESD と偶発症

進む勇気と退く勇気

小山恒男・小野裕之 編

青森県立中央病院

吉 田 茂 昭

“これほどの書をよく出したものだ”。それが読後の素直な感想である。

ESD は 1995 年に細川が IT ナイフを用い、ERHSE に準じて全周切開による粘膜切除を試みたのが嚆矢とされるが、1999 年に共同開発者の小野、後藤田らが粘膜下層の剝離操作を加えることで、より正確な切除が可能となることを明らかにしたことから、その後の相次ぐ様々なデバイスの開発とも相まって急速に進歩し、今日では押しも押されぬ標準的治療となっている。しかし、この十数年間の進歩の影には数多くの苦い経験や失敗例があり、いつ潰れてもおかしくない状況にも見舞われている。これを乗り越える気力と工夫と技量があったからこそ、今日の位置を占めることができたのであるが、それは一面において偶発症との戦いとも言えるのである。一方、“必要は発明の母”ということがあるが、正にデバイスの開発や治療技術の進歩がそれで、当時全く不十分であった作業条件は次々と改善され、今日ではデバイスや作業条件に起因するような失敗例は少なくなっている。問題は、術者の判断に起因する偶発症である。切りすぎによる術後狭窄、術中穿孔、遅発性穿孔、大量出血、術後の機能障害等々、様々な落とし穴が待っている。それらがど

のような状況下で引き起こされたのか実例を通じて正しく理解できれば、常に最悪のシナリオを想定することが可能となり、偶発症の具体的な一連の予防策がイメージできるようになるはずである。本書のねらいはその辺にあるように思われる。

編者のお二人はもとより、執筆陣の大部分は 10 年以上の長きにわたって ESD の開発に携わってきたパイオニアであり、“神の手”とも言われる程の高い技量を持った内視鏡医である。このような先人達が自らの失敗例を公開し、いかにして正確で、安全な治療を行うかを学ばせようとする姿には説得力があり、感動的ですらある。そこには偶発症との戦いを制しながらも偶発症を畏れ続ける玄人の対応をみることが出来る。これまでに出版された治療手技の解説書や指南書の類はあまた存在するが、その大部分は成功体験を学ばせようとするものであり、読者の側も成功体験を強くイメージすることで、前向きに取り組むエネルギーを得ていたように思われる。しかし、本書では、第三章「実例から学ぶ」に大部分の紙幅を割き、計 36 例（咽頭 2，食道 7，胃 13，十二指腸 5，大腸 8，その他 1）の偶発症例の詳細が呈示されている。中でも、「提示例から学ぶポイント」，「ここがポイント“退く勇気”」が秀逸であ

る。読者には単なる文字情報として読んでしまうのではなく、状況を想像しながら、繰り返し、繰り返し読み込んで、それぞれに示されている注意事項を、頭だけではなく体の中に覚え込ませる位の敬虔な態度が求められよう。なぜなら、これらは偶発症に苦しまれた患者さんの命を賭した教えとも言えるからである。尊い犠牲を無駄にしない、そこで得たものを少しでも多くの人と共有し、さらに安全な ESD の実現を目指そうとする、著者らの謙虚で、しかし意欲的な試みであることを、読み手の側も十分に汲み取っていくべきであろう。

本書の序文に、“賢い人は先人の失敗から学び、自らは失敗しない。普通の人は自ら失敗して初めて気づくが、愚かな人は自らが失敗しても気づかない”とあるが、全くその通りである。先人の失敗つまり本書に学ぶことによって、失敗を避けることができるはずである。初心者はもとより、そろそろ自信を持ち始めた（逆に言えば危険を一番内在している）中級者、更には熟練の域に達したベテランをも含め、失敗に学ぶ本書は必携の指導書と言えよう。

●B5 頁 194 2012 年 定価 7,350 円
(本体 7,000 円 + 税 5%)

南江堂刊 (☎ 03-3811-7239)